

## 6年制医学部医進課程1期生は今卒後50年

青木 謹

### 1. 6年制医学部医進課程の発足

昭和29年3月に、学校教育法第55、56条の改正によって、一貫した医学部の6年制がとられることになり、千葉大学では昭和30年4月から医学部医学進学課程が設置された。(千葉大学30年史より)

それまでは、医学部医学専門課程に進学するためには、千葉大学の場合、文理学部医学進学課程に入学し、所定の単位を取得して専門課程の受験資格が得られ、再び受験したのであるが、この時の学制改革は、医学部医学進学課程に合格すれば、医学部専門課程に進む時は試験がなく、そのまま専門課程に進むことが出来る制度で、我々はその第1期生だった。

我々の卒業年は、昭和36年であるが、昭和35年卒業生やそれ以前卒業の先輩各位で、千葉大学文理学部医進課程に在籍した先輩諸氏は、過酷な受験時代を過ごしておられる。と言うのは、千葉大学文理学部医学進学課程は東京医科歯科大学予科を吸収合併している関係で、同大学の医学部定員40名と歯学部60名の分があり、千葉大学医学部の定員80名と併せて、医学専門課程を目指す人達が文理学部医進課程だけで120名もあり、2年間で所定の単位を取得すると、一期校千葉大80名、二期校医科歯科大40名の定員を目指して争うわけで、両大学が同じ受験日の一期校か二期校ならともかく、両大学が一期校と二期校に分かれていたので、級友同士がしのぎを削る受験地獄であった。

### 2. 新制度への移行期

我々が医学部医進課程に入学した時、同時に東京医科歯科大学より委託された同大学医進課程(定員40名)及び歯学進学課程の学生も我々と共に文理学部のある稲毛で学んでいる。(昭和30年4月より昭和33年3月迄)

英語、ドイツ語等、外国語の授業は進路別のクラスになっていたが他の教養科目の授業は各自の選択に任されていたので当然医科歯科大へ進む人達と語学以外の授業では一緒に聴講していた。また、千葉大学医学部の定員は80名であるが、学制改革移行期のため、昭和30年度医学部医進課程の募集人員は60名で、医進課程修了者(専門課程進学のための所定

単位取得者、千葉大の場合文理学部医進課程修了者等)で医学部専門課程に入れなかった人達(医学部浪人)への対策として2年後の昭和32年度に残りの20名を募集し定員を満たしていた。(昭和34年度より医進課程の募集は80名となる)

### 3. 医学部医進課程の頃

私の場合、2浪していたので、千葉大学に在学していた高校の同級生が「医進課程ばかり狙わず専門課程受験資格単位が取得可能な文理学部自然科学課程を狙ったらどうか、とアドバイスされ、受験し合格出来た。そして6年制医学部の発足により、その翌年受験し医学部医進課程を受験し合格したのだった。

文理学部自然科学課程に1年生として在籍していた時、クラスは社会科学課程の人達と混成クラスになっており、その級友の一人が2年生になってから文理学部自治会長になった。そのせいで「試験のない医進課程に入ったのだから、稲毛祭実行委員長をやって欲しい」と懇望された。同級生達が「応援するから」ということで引き受けた。級友達は稲毛祭運動会の仮装行列に大挙して参加し、大学祭を盛り上げてくれた。

当時の千葉大学初代学長の小池敬事教授が稲毛祭の視察においでになられた。小池学長をご案内しながら、先生に「早く鉄筋の建物の校舎を作ってください」と申し上げたところ、「いいじゃないか、こんな青空のもとで学ぶことは素晴らしいことじゃないか」と簡単に言われてしまった。初代学長と会話が出来たこと、そしてこのお言葉は、私にとり生涯忘れられない言葉となっている。

当時の千葉大学文理学部稲毛校舎は、カマボコ兵舎を改造した教室が敷地内に散在しており、西千葉にあった東京大学生産技術研究所講堂と併用していたので、昼休みに西千葉・稲毛間を電車で移動することが度々であった。医学部医進課程に在籍し、文理学部で教養課程の授業を受けていた頃、医学部に入ったのに医学の「イ」の字も教えてくれないと不満を漏らす者もいた。しかし、同じ時期同じ場所で文理学部医進課程の2年生の皆さんが過酷な受験事情の中を必死に頑張っているのに我々は悠々と青春



を謳歌していたのだった。高尾山（東京）、大野山（神奈川）、赤城山（群馬）へのハイキング、白峰三山（北岳、間ノ岳、農鳥岳）への登山など、山岳部の連中（小野沢君夫、滝沢英夫、田部井徹、中田義隆 等）が計画し、ハイキングの楽しさ、山の素晴らしさを教えてくれた。また、稲毛祭の仮装行列では、同級生達の発想力の豊かさに驚かされた。医進1年の時は日本国憲法と当時の世相を巧みに皮肉り、2年の時は安い赤の布地で女子がワンピースを作り男子20数人がそれを着用し運動場でラインダンスを披露、まさに圧巻であった。

#### 4. 医学部専門課程

解剖実習をはじめとする基礎医学の授業や実習が始まると、さすがに医進課程時代の自由奔放な動きは少なくなり授業に集中するようになった。しかし、高学年に進むにつれ、運動部の対外試合の増加、医学連等の外からの働きかけ等により自分達の殻の中だけではすまなくなっていた。特に昭和34年は我々同級生は多彩な動きをみせた。当時の主な出来事を列挙すると、

|             |                         |
|-------------|-------------------------|
| 昭和31年10月19日 | 日ソ国交回復                  |
| 12月12日      | 国連加盟                    |
| 昭和32年10月4日  | 人工衛星の打ち上げ成功<br>(ソ連)     |
| 昭和33年11月27日 | 皇太子妃決定                  |
| 12月1日       | 1万円札発行                  |
| 昭和34年5月27日  | 東京オリンピック決まる<br>(昭和39年夏) |

9月26日 伊勢湾台風

11月27日 安保反対等でデモ隊の国会構内突入

昭和35年6月15日 安保阻止国民会議統一行動で全学連7000人が国会構内突入。警官隊と乱闘。東大生樺美智子さん死亡。

##### (1) ゐのはな同窓会報の発行

医進課程の頃、第6号までクラス会誌「KA IHO」（1年下の医進課程の皆さんとの交歓に役立った）を作っていた黒田は、一時期青木と共に千葉大学新聞会に所属していたが医学部関連記事の少なさに満足できず医学部だけの新聞製作を模索していた。一方、大学側もゐのはな同窓会長であった谷川久治教授、小林竜男教授が同窓会報発行により同窓会の活性化が図れるとして同窓会報の発行に意欲をみせた。同窓会側は機関紙を出す予算はあるが製作にあたるスタッフがいない。学生側は紙面を作る意欲はあるが資金がない。利害が一致したところで、紙面は半分を学生用のページとする黒田の考えが採用され、同級生4人（黒田健昭、下鳥隆生、末吉貫爾、松本圭）が協力してゐのはな同窓会報創刊号が発刊（昭和34年5月1日）されたのだった。一方、青木は赤松亘（昭和33）等先輩達が活躍していた千葉大学新聞会から医学部関係者が一度にいなくなるのはまずいとして一応残ったが、亥鼻での実習や他の部活動のため、稲毛の編集部まで行く時間がなくなり、自然退



会という形になってしまった。しかし、新築まもなくなかった基礎医学教室の各フロアの基礎医学教室配置状況を掲載した記事や谷川久治教授の千葉大出身初の学部長就任記事（昭和33年10月20日発行）は、鈴木伸典と共に取材し好評だった。

## (2) 東日本医科大学総合体育大会初期の頃

東日本医科大学総合体育大会（以下東医体と略す）は、第1回が東京大学主管で昭和33年に開催された。（その前年、関東医科大学体育大会が慶応大学主管で開催）

昭和34年第2回東医体（主管日本大学）第1回評議員会に千葉大学代表として出席した青木は、席上で第3回大会を総合大学である千葉大学が主管して開催して欲しいと強く要請された。大学に帰り、伊藤忠男医学部事務長に伝えたところ「今受けられる状態ではない」と断るよう指示されたので、何とか辞退した（その後、後述の全国医学生ゼミナールは大学に相談せずに引き受けてきたので、主管校として開催）。しかし、遠くない将来主管しなければならないとの雰囲気だったので学内体育関係の部の組織化を計る一方、多くの部の充実を要請した。そして昭和34年夏は主管校となることに備え、主管校日本大学を中心とした都内会場で熱戦を展開している千葉大勢の活躍を観戦のため歩き回った。

第2回大会 千葉大学戦績

優 勝 硬式野球，男子バドミントン

準優勝 女子バドミントン

4 位 サッカー，男子卓球

参加チーム 硬式庭球，軟式庭球（男子），  
水泳，山岳，籠球，空手，陸上，バレー（男子），柔道

総合得点 27点 団体戦4位

東医体の夏が終わって、東医体次年度評議員を決めなければならなかった。遠くない将来主管校を受託せざるを得ない情勢だったので、体育系クラブの組織化を計るため、体育会を組織させ、会長に福士和夫、東医体評議員にバドミントン優勝の原動力となった小林總介を指名し、後事を託した。その後、案の定千葉大学は第5回大会を主管し、千葉市内で東医体の熱戦が繰り広げられた。東医体夏季大会を千葉大学が単独で主管したのはこの第5回と第23回の2回である。

|           | 第5回                        | 第23回  |
|-----------|----------------------------|-------|
| 会 長       | 鈴木 正夫                      | 井出源四郎 |
| 副 会 長     | 寛 弘毅                       | 佐藤 博  |
|           |                            | 大谷 克己 |
| 理 事 長     | 小林 竜男                      | 石川 清  |
| 評 議 委 員 長 | 深尾 立                       | 高 在完  |
| 評議副委員長    | 河野 守正                      | 松村竜太郎 |
| 運 営 委 員 長 | 深尾 立                       | 白澤 浩  |
| 運営副委員長    | 河野 守正                      | 下山 直人 |
| 千葉大学優勝    | 5, 6, 7, 9, 10, 15, 23, 25 |       |
| 準優勝       | 11, 14, 28                 |       |
| 3 位       | 4, 16, 21, 22, 26          |       |

## スキー大会について

福士和夫は初代体育会会長に就任した頃、同級生達（岩倉弘毅、黒岩璋光、宍倉正胤、島田晃一郎、森豊 等）とスキー部を創設し、スキー大会を黒岩の実家のある万座での開催を考えた。せっかく開催するのだから公式なものにしたいとの願望から当年度評議員であった青木に協力を求めた。青木は夏季主管校日本大学の東医体理事長小島徳造教授、評議員会副委員長佐藤寿之にその旨要請した。ご両人がスキー大会の開催された現地万座に出席したことにより東医体冬季部門第1回スキー大会の主管校が千葉大学として公式なものとなった。

## (3) 第5回全国医学生ゼミナール

第5回全国医学生ゼミナールは千葉大学が主管し、昭和34年11月22日から24日まで開催された。これは全国の医学生、歯科医学生、看護学生の各大学の代表が集まり、それぞれの総会を開き、医学教育、医療制度、その他医事に関するテーマ別分科会、医学各分野における自由研究分科会等を開き、医学生、歯科医学生、看護学生の交見と交歓とを期する催しであった。第5回大会は全国の42大学より1000人余りが参集し、90数題の発表があり成功裡に終わった。

## 第5回医学生ゼミナール役員氏名

会 長 谷川 久治  
顧 問 鈴木 正夫、小林 竜夫、斉藤 十六

柳沢利貴雄、鈴木 次郎

実行委員会委員長 小倉 敬一  
副委員長 吉川 武彦、岡田 信道  
事務局長 谷合 明  
企画部 ○松江 寛人、杉岡 昌明、中村 嘉孝  
組織部 ○深谷 邦男、高井 満、村山 憲太  
情宣部 ○黒田 健昭、末吉 貫爾  
財政部 ○吉川 武彦、桧山 輝男、宍倉 正胤  
玉置 哲也、宮島 哲也  
庶務部 ○井村 价雄、藺部 和子  
大会運営部 ○庄司 謹（改姓青木）  
滝沢 英夫、中田 義隆  
小野沢君夫、小幡 五郎  
中村 嘉孝、杉岡 昌明  
宍倉 正胤

歯科学生分科会委員長 金山 公彦  
看護学生分科会委員長 板谷 幸子  
分科会座長 谷口 滋、戸井 道夫  
川村 光毅、長谷川修司  
成瀬 幸月、鈴木 光

○印 部長

## (4) 安保反対等の動き

医学部の高学年になるにつれ、リーダー的存在になってくると、社会情勢に目を向ける者が多くなってきた。昭和34年9月26日伊勢湾台風は愛知等東海3県に当時としては空前の被害をもたらし、死者不明者5200人余。被災地に滝沢英夫、小倉敬一等数人は現地に赴き救援活動に



## 第4章 同窓の発展

加わった。昭和34年11月27日安保反対等で全学連等のデモ隊は国会構内に突入。昭和35年6月15日には全学連7000人が国会構内に突入し、警察隊と乱闘の中、東大生樺美智子さんが死亡するという痛ましい事件も発生した。その時何人かの級友達はその周囲にいたとして千葉地検に出頭を求められ事情聴取をされている。当時級友の深谷邦男は「この人をマークしていれば千葉県内の安保反対等の左翼の動きがすべて判る」と新聞記者達からマークされていた。

## 5. そして卒業後50年

昭和30年（1955）4月、千葉大学に入学し、素晴らしい環境の中で6年間（一部4年間）、共に学んだ仲間達は昭和36年（1961）3月卒業して50年、この半世紀を医学教育、医学の進歩、医療の充実に貢献した事は間違いない。その一端の紹介となろうが教授病院長等に就任した者を紹介する。

|        |       |               |
|--------|-------|---------------|
| 国立研究所長 | 山崎 修道 | 感染症研究所長       |
|        | 吉川 武彦 | 精神神経センター研究所長  |
| 副学長及教授 | 小越 章平 | 高知医科大学        |
|        | 塚原 重雄 | 山梨大学          |
| 教 授    | 今野 昭義 | 千葉大学耳鼻科       |
|        | 中島 伸之 | 千葉大学外科        |
|        | 大川 治夫 | 筑波大学小児外科      |
|        | 白石 博康 | 筑波大学精神科       |
|        | 北澤 克明 | 岐阜大学眼科        |
|        | 川村 光毅 | 慶応大学解剖学       |
|        | 栗原 稔  | 昭和大学豊洲病院内科    |
|        | 国安 芳夫 | 昭和大学藤が丘病院放射線科 |
|        | 近藤 省三 | 昭和大学藤が丘病院形成外科 |
|        | 長尾 孝一 | 帝京大学病理学       |
|        | 野尻 雅美 | 千葉大学看護学部公衆衛生  |
|        | 横山 健郎 | 国立佐倉病院        |
| 病 院 長  | 鈴木 伸典 | 長野県立阿南病院      |
|        | 松本 生  | 埼玉県立寄居こども病院   |
|        | 村田 忠雄 | 千葉県立リハビリセンター  |
|        | 中田 義隆 | 筑波メディカルセンター   |
|        |       |               |

|                   |           |
|-------------------|-----------|
| 福山 悦男             | 国保君津中央病院  |
| 前嶋 清              | 国保小見川中央病院 |
| 田 紀克              | 国保成東病院    |
| 加藤 喜市             | 千葉市立海浜病院  |
| 関 幸雄              | 川鉄病院      |
| 保健所長 小倉 敬一        | 船橋        |
| 地区医師会長 黒田 健昭      | 印旛市郡      |
| 青木 謹              | 安房        |
| 下鳥 隆生             | 別府市       |
| 中田 義隆             | つくば市      |
| 全国保健所長会会長 小倉 敬一   |           |
| 千葉県医師会代議員会議長 青木 謹 |           |
| 国保君津中央病院企業長 福山 悦男 |           |

## 6. 番外編（卒業記念アルバムを巡って）

「千葉大学医学部85年史」冒頭の写真集の中に我々の「昭和36年卒業記念アルバム」から選ばれた写真が4枚あった。

講義室（病理学 滝沢延次郎教授の講義）  
外科臨床講義室（一外 綿貫重雄教授）  
内科臨床講義室（二内 斎藤十六教授）  
学生食堂

外科臨床講義室と内科臨床講義室の写真は、記念アルバム用の写真を撮るとして片側にクラス全員を集めて写真撮影を済ませたもので、写っている人達は殆ど同級生である。また、卒業記念アルバムに恩師（教授）のポートレートを掲載させて頂くために殆ど全部の教授の撮影を安武写真館にお願いし、我々アルバム委員がそこに立ち会った。せっかく写真を撮るのだから教授の皆さんの誕生日に撮影することにした。85周年記念誌の中心的存在であった愛称ゴリちゃんこと鈴木正夫教授の撮影に第一生理学教室に行った時である。教室員が「教授は朝からソワソワしていた」とのこと、鈴木先生はその日が還暦の誕生日だったのでした。この1、2年に撮った教授の先生方のポートレートが他の学年の皆さんのアルバムにも使われているのをみるにつけ、その当時苦労した甲斐があったと秘かに喜んでいる。

卒業記念アルバム委員  
神谷定治、末吉貫爾、谷口 滋、藤塚立夫  
松本 生、青木 謹

（あおき ひとし）